

GUINNESS STOREHOUSE

海外学生派遣事業報告書

ESTD 1759 杉野 隆一 (生命共生体進化学専攻)
Home of Guinness, Dublin

1 概要

私はアイルランドの首都ダブリンにあるトリニティカレッジ (Trinity College Dublin) の Wolfe 教授の研究室に参加しました。2009年7月14日から9月16日の日程です。

トリニティカレッジではWolfe教授と話し合って決めた研究テーマで研究を進めました。また、研究室で毎週行われるジャーナルクラブに参加しました。Wolfe教授の研究室はゲノム研究において世界の最先端のひとつであり、そこに参加できたことは世界の研究室を知る上でためになりました。

アイルランドは気候も穏やかであり、ダブリンも街が小さくまとまっていて、短期滞在でも快適な生活を送ることができました。難点を挙げるなら物価が高かったことです。また公用語には英語も含まれているのですが、なまりのきつい人も多かったことが印象に残っています。

2 派遣前準備

まずどうやってWOLFE教授と連絡をとったかについて話します。私は2007年度の総研大の生命科学系合同セミナーにおいて、企画者の一人として招待講演の演者の選定に参加しました。その候補に私が以前から研究内容に興味を持っていたWolfe教授を選び、彼からも快諾をいただきました。幸い彼も私の研究のことを知っており、私のことに興味を持っていてくれたことが分かりました。そこで、総研大には学生海外派遣事業があることを説明し、研究室を訪問することを認めてもらいました。

アイルランドの公用語は英語なので、語学に関しては渡航に当たって特別な準備はしていません。強いて挙げれば授業に出席したくらいでしょうか。

我々の研究分野では個人のコンピューターを用いたデータ解析がメインになります。そのため研究についての準備にも特別なものは必要なく、トリニティカレッジで

の研究内容も打ち合わせはせず全て現地で準備・解析を行いました。

3 生活状況

3.1 住環境

トリニティカレッジの宿舎は夏の間は解放していませんでしたので、住まいはWolfe教授の研究室の院生の部屋を間借りしました。大学の近くなのですが家賃は1200ユーロでした。当時のユーロは135円程度だったので円換算でおよそ16万!!これをフラットメイトと折半していました。設備や新しさは日本のワンルームマンションに比べると多少見劣りします。家具付きの部屋だったので、リビングの優雅さはなかなかでした(右の写真です)。他によかったことは間取りが(日本に比べて)ひろいこと、歴史を感じさせる趣のある建物というところです。



3.2 食生活

ヨーロッパでの一般的な食生活は、朝と夜にしっかり食べて昼はつまむ程度で済ませる傾向にあるようです。実際に研究室のメンバーの昼食はスナックやリンゴなどでした。

私の滞在期間は2か月だったので食事は主に外食や簡単なもので済ませていました。昼は主に学校の食堂でした。アイルランドの主食はポテトでよくラザニアとセットになっていました。サイズはアメリカンクオリティというか、大盛りでした。料金はおよそ5ユーロ、学外で食べるのに比べるとややお得というところです。

米が食べたいときは中華バイキングやベトナム料理を食べていました。ダブリンは日本食の店が少なく、また出される料理も普段日本で食べてるものとはほど遠い気がします。ダブリン市内では中華バイキングが普及しているようで至る所で見かけました。アイルランドでは主食のポテトですが日本人にとっては基本的に塩気

1: 上の写真はアイルランドの典型的な集合住宅です。およそ300年くらい前に建てられたもので、最上階の狭い窓にはservantが住んでいたそうです(複数から聞きました)。下の写真は我が家のリビングです。洗濯物は部屋干しです。

が少ない感があります。その点マクドナルドのポテトは安定したクオリティで頼もしかったです。

3.3 言葉について

研究室のメンバーと会話するときは、研究内容が近いため研究に関して話すときは問題はありませんでした。生活に関しては身振り手振りも使えば通じないことはありませんでした。また、うまく会話が成り立たなくても現地の人は優しく対応してくれました。アメリカとはえらい違いです。英語は外国人の英語の方が聞き取りやすかったです。



アイルランドは英語が公用語なのですが、最近の民族運動では現地のケルト語を復活させようという流れがあるそうです。特に西の方では学

2: 中央部にあるアイルランド第三の都市Limerickで食べた豚レバーのグリルwithポテト(薄味)。西海岸では魚料理が多くでてきました。

校でケルト語を教えることが義務化されているそうです。その名残なのかどうか、西部出身の人の英語は基本的に聞き取れない印象がありました。傾向として言葉をはっきりしゃべらず、口の中でごもっている感じです。ただししっかりとした英語力があれば問題はなさそうなので、私の英語力不足も原因の一つです。

「パブにはいったか?」これがアイルランド人の殺し文句でした。パブはアイルランダーの社交場で、金曜の夕方(6時頃)のパブは歩道にはみ出すほど賑わっています。明るさは昼間である(夏の日没は11時)にも関わらず、です。そんなアイルランドの信教はギネス教です。アイルランドで生まれたギネスビールは世界中に広められ、各パブにはギネスを讃えるポスターが掲げられています。背景に使ってる写真は、その聖地に巡礼にいくともらえるパンフレットです。日本語版も用意されています。

3.4 観光都市ダブリンとトリニティカレッジ

ダブリンの街は小さくvisitorが行く場所はほとんど歩いていけます。交通機関はバスと路面電車があります。路面電車は最近配備されたものらしくとてもきれいでした。トリニティカレッジは首都ダブリンのまさに中心地に位置しています。また観

光の目玉の一つでもあり大学は市民にとっても簡単に入れるようになっていました。トリニティカレッジは400年の歴史を誇る大学で、建物も相応の歴史を感じさせるものでした。

トリニティカレッジの目玉は図書館に秘蔵されてある『ケルズの書』です。これはアイルランドにキリスト教が布教されたときに教義を現地の言葉に翻訳したものです。この本が有名なのには2つの理由があります。一つは本の表紙にきれいな装飾がされていること、もう一つは文章中の訂正に凝った装飾がされていることです。

図書館への入場は有料(なんと学生割引で8ユーロ)な上に一度に入れる人数にも制限があり、毎日行列ができていました。ちなみに私はWolfe教授の御力で、順番待ちもなく無料で入れました。権力って素晴らしいです。



3: ダブリンのファッションリーダーたちです。あちらでもチョイ悪親父が流行っている模様です。

4 研究に関すること

4.1 研究状況

トリニティカレッジでは、日本で進めている研究とWolfe教授と相談して決めた研究テーマを並行して進めていました。私は博士論文のテーマとして出芽酵母のゲノム進化を対象に研究しています。出芽酵母は真核生物のモデル生物として、ゲノム配列も真核生物では最も早く同定され(1996年)、その後のポストゲノム研究においても最も研究が進んでいる種の一つです。

今回私が訪問したWolfe教授は出芽酵母のゲノム進化研究のパイオニアの1人です。Wolfe教授の代表的な研究として、出芽酵母で過去にゲノム倍加が起こったことを証明した研究が挙げられます(1997年)。以降、彼はゲノム倍加を中心に、出芽酵母に限らず、植物や脊椎動物などに関しても研究を行っています。私の現在の研究においても彼の研究室で開発されたソフト(Yeast Gene Order Browser)を使っています。

研究室のイベントは、毎週一回のセミナーでその日に進捗状況の報告とジャーナルクラブを行っています。発表者は当番制です。それ以外の日は各自で勝手に研究を行っていました。私は期限も短いため教授とディスカッションをする時間を多く割

いてもらいました。

5 反省

アイルランドに入国するとき移民局で捕まりました。アイルランド訪問の目的を証明する書類を持っていないことが原因でした。不法滞在の取り締まりだそうです。油断していました。

派遣されたみなさんが書かれています、よその研究室をみることは分野での自分の位置を知ることができる貴重な機会だと思います。特に海外の研究室へ行くのにはお金の問題もあり、気軽に行けるものではありません。このような機会を与えて下さった総研大に、この場を借りてお礼を述べさせていただきます。また支援をいただきました生命共生体進化学専攻、研究室、また国際交流係の方にもお世話になりました。ありがとうございました。

